

## 上町ヒストリー町づくりプロジェクトに参加して

「鹿児島近現代」教育研究センター センター長 丹羽 謙治

令和5年3月18日、法文学部の金子満准教授が企画された地域シンポジウムが、上町サンクチュアリと共催で開催された。石橋記念館の背後に桜島と西田橋を望む同館の1階フロアで、春の陽ざしが降り注ぐなか、アットホームな雰囲気で行われた。

今回のシンポジウムの趣旨は、小学校の校区で成立しているコミュニティ協議会の制度が、歴史的、経済的な地域を分断したものになっていないかという問題提起から、いかにして地域の歴史的文化的資源を共有して街づくりを行っていけるのか、地域を繋ぐ方法を探るといったものであった。

校区コミュニティ協議会の運営に直接かかわったことはないが、その制度ができる以前に小学校のPTA会長を務めた経験から、町内会や校区の枠を超えて広域で共通する問題について議論をしたり交流を深めたりすることが必要であると感じていた。今回、基調講演を任されたが、地域の問題をどのように扱うのかといった社会連携について専門としていないため、自分が鹿児島で行ってきた研究と「上町」地区とが多少とも関わりをもっていたことから、自身の研究にひきつけて上町の歴史とその魅力について話すことにした。

私は薩摩藩の出版研究から、木脇啓四郎という薩摩藩士の研究を行ってきたが、江戸時代中期に木脇家はそれまで城下の中心にあった屋敷を手放し、城下の南西の外れ、現在の鹿児島市唐湊に屋敷を構えた。啓四郎は唐湊温泉の発見者でもあり、唐湊地区に長く住んだかに思われるが、実は意外にも長い期間住んでいなかった。沖永良部島で生まれ、八歳で鹿児島の本家に引き取られて唐湊に住んだものの、その後は茶坊主として鹿児島城に勤務しており、城の

中か周辺に居住していたものと思われる。幕末の動乱から明治初期には、地方官として甑島や揖宿などで行政を担当していたが、明治以後も博覧会事務所で東京に赴いたり、苗代川陶器会社の運営をしたりとひとつの場所に留まることはなかった。おそらく西南戦争以降は唐湊に引っ込み、輸出用の茶の製造などをしたが、その後沖縄農場試験場勤務もあり、家を空けることが多かったのである。

ペリーが浦賀に来航する前後、啓四郎は上町に住んでいた。二度にわたる江戸詰も経験し、甲冑製作の技術を習得して帰ると、末川近江邸の門前に建てられた甲冑製作所の役宅に住み、ここで武具の製作に従事したのである。その場所は、佐藤小路（旧今給黎病院の南の小路）が国道10号線とぶつかるあたりである。西洋列強の進出に備えるため、甲冑などの武具製作が上町地区で行われたこともささやかな歴史の一齣である。

さて、話は啓四郎と磯地区との関係に飛ぶ。ここは清水小学校の校区で、同校は桜島の遠泳でも知られている。啓四郎は、幕末に文字通り桜の名所として知られていた桜谷が砲台建設のために山肌が削られ土砂が露出したままになっていたのを元に戻そうと桜の植樹を思い立つ。また、明治の半ばごろ、鳥津家の保護が得られなくなって荒廃した磯天神（菅原神社）の拝殿の格天井の百花図を手弁当で修復した。このように四条派の画家でもあった啓四郎は景観や土地の賑わいに対して細やかな配慮を行うことができる人物であった。

上町地区は他の地域が羨むほどの自然と歴史と文化が集積する地域、住民が誇りを持てる要素が探せばいくらかでも出てくる地

域である。〈史〉と〈景〉に富む地域—それを再認識していただくとともに、街づくりに応用されることを強く望む次第である。

町づくりに大学生をいかに参与させるか——。十年ほど前、尚古集成館の全面的な協力を得て、「磯プロジェクト」なる企画を三年間実施したことがある。学生に年間パスポートを配布し、仙巖園に足を運んでもらい、学生各自が研究テーマを設定して年度末に報告してもらうというものであった。毎年、1、2回は教員が学生を引率して現地やその他の史跡を探訪することも行った。このような企画を上町全体に、そして町内会やコミュニティ協議会や各種イベントへの参与にも拡大して行うことができないかということを考えてみた。

休憩をはさんで行われたパネルディスカッションでは、松田学部長と私以外の方々は地域で活躍されている方々が実践されている企画や改革について語られたが、どれも取り組みとして興味深く、大胆な

PTA 改革など先端的な活動について話題が展開していった。学校の伝統や雰囲気は校区によって異なるのを肌で感じながらも、地域のリーダーの存在を頼もしくまた羨ましくも思った次第である。それを象徴するのが帰りがけの一光景。パネラーを務められたPTA 会長、NPO の方々が熱心にある話題で盛り上がっていた。子供たちと段ボールで甲冑をつくり、校区対抗の合戦をしたらどうだろうか、と。

学生を地域に送りこむ具体的な仕組みについてはセンターが考えていかなければならない課題である。最近では教員のみならず学生も大変多忙である。有意義な経験を積んで社会に出ることは本人にとっても意味のあることであり、地域づくり・町づくりに関心を持つ学生が地域の支えとなるであろう。「鹿児島の近現代」学生サポーターの工夫が我々の宿題となったことを記しておきたい。

